靖国神社参拝についてのコメント

衆議院議員　古屋圭司

日本は大戦後自由と民主主義に復帰しただけでなく、法の支配、人権、人道主義の下で、平和主義に徹した国家運営を進めてきた。日本は七十年間、他国で一発の発砲も行っていないが、これは先の大戦に対する日本政府と国民の深い反省に基づくものである。安倍内閣が「積極的平和主義」を掲げているのも、このような考えに沿ったものである。

私は、国会議員に当選以来、春の例大祭、八月十五日、秋の例大祭での靖国参拝を欠かしたことがない。靖国神社とは一部メディアで喧伝されるような戦争を美化するための施設などではなく、明治維新以来、国のために命を捧げた肉親や友人の魂を癒す場所として、過去一〇〇年以上にわたり、多くの国民が維持・参拝してきた施設である。

国会議員が、自らの国のために命を捧げた人たちに哀悼の誠を捧げ、平和への誓いを改めて表することは、国民の代表である我々国会議員の責務であると考えている。

また、私は衆議院議員であると同時に日本人でもあり、一人の日本人として靖国神社に参拝することは当然のことと考えている。

以上が、私が靖国神社を参拝する理由である。

そもそも、近隣諸国を刺激しようなどという意図は全くない。その上で、一国が、その国のために命を捧げた英霊に対しどのような形で追悼の誠を示すかは、専らその国民が考えるべき国内問題である。

靖国参拝について、日本国内外の一部メディアで過剰な報道がなされている現状は、結果として国益を損ねていると言わざるを得ない。